

六花



RIKIWA

10

俳句雑誌りつか
2015 (平成27年)

cover design Yuna Mizuno

こん
今

梵字一つの

山田六甲

水に住む月も今宵を雲の上
雁待ちに鶏頭は火を飛ばしけり
萩に寝て梵字一つの遊女塚
むら萩や二つに割れしをみな塚
宵待や夕波彦ひこ火ほ火ほ出み見み尊こと
秋風の狭くゆるやかな郭
夕影の丘となりけり月を待つ
待宵のはじかみの端囁みにけり
舟待ちの大王すすき噴きにけり

裸婦の繪に燈火親しみみたりけり
待宵の東より潮昏れて来て
鯰若し跳ねて相生湾の風
秋天を落ち来て鯰の音となる
秋暑かな龍に馬脚のあることも
気をもめば形なし来し小望月
待宵の映るものなき浦^{うら}曲^わかな
萩すすき夢二に生けてありにけり
待宵の櫟たちはだかりゐたり

白蓮の諸手につつむ蕾かな
花蓮の水に移れる風新た
玉虫の爪の先まで美しき
玉虫の色を尽くして泳ぎ切る
捨舟に波のおよばず夕焼くる
さみしさの待宵草に揺れてをり
噴水にかくれし吾子の影走る
高熱の夫の寝息や水中花
枇杷熟るる妹のひとりは東京に
演奏を終へたる吾子や遠花火

水中花静か静かな世界なり 森山あつ子

すいちゆうかしずかしずかなせかいなり もりやまあつこ

打ち水を始めし午後や水中花

水中花額寄せ合ふ姉妹

水中花咲かせ宇宙の片隅で

鮮やかに色放ちたる水中花

水中花静か静かな世界なり

「水中花」で切れる句ではなく、「水中花静か」まで読み下してから一旦切れる破調の句。最初読者の目は揺れもせず静かに咲いている水中花に引きつけられる。次に「静かな世界なり」と水中花の世界に引き込まれていく句である。あつ子は句会で自らの句が詠み上げられても、いきり立つて名告らない。「えっ私？」というふうに、どこか淡々と構えている人。句柄も濃厚で静謐で、この句はそういうあつ子らしい詠みぶり。何のてらいも技巧も凝らさない。この句は読者が水中に咲く花の立場になるよう仕組まれている。そこには句のような静かな沈黙の世界が存在しているのだ。

雪卿集

水中花

永田万年青

病む人の眩しみみたる水中花
水中花憂き事しばし忘れけり
葉柳の白く光りて揺れてをり
あめんぼう三倍ほどの影をもつ
炎帝や思ふほど歩の進まざる

打水

佐津のぼる

沈みつつ濁りに透ける錦鯉
夕焼けの空うつくしく崩れけり
梅を干す雲の往き来のなき日和
打水や屋台つらねて小商ひ
鯔桶に海老の尾のこす誕生日

雪卿集

滝
出口
誠

滝つぼに落ちて上がりぬ箕面川
滝しぶき白に土色混じりけり
濁流の音に負けある蝉の声
川幅をいつぱい使ひ滝が落つ
滝の水霧雨となりふりかかる

タンゴ
升田ヤス子

ほうたるの新しき闇生まれけり
夏蝶の釣灯笼を縫ひゆけり
アルゼンチンタンゴ踊るよ夏の蝶
色褪せてしまふのは嫌水中花
水中花たゆたふてゐる夜明かな

雪樹集

夏燕

住田千代子

玫瑰の棘に破れて風ゆけり
扇風機子の来る度に仕舞はるる
梔子のおほかたは色保てざる
大空を翻したる夏燕
聖堂の方より来たる夏の蝶

夏の蝶

廣畑育子

石庭に色を正せる夏の蝶
田植機の音の中なる夏の蝶
夏蝶の揺るるままなる草の花
けむりの木大回りする夏の蝶
夏蝶来水面に影の動きゐて

蛩雪譚

六甲選

二十七年十月号鑑賞

釈尊は衆生の気根に応じて華嚴、阿含、方等、般若、法華、涅槃の順番で経を説いた（と言われているが真偽は不明）。六花をそれに当て嵌めるのは不遜と叱られるかも知れぬけれど、初心者向け、中級者向け、上級者向け研究者向けに説いて行く。しかしここに示す句は俳句を学ぶ全ての人が目標の一つとして覚えていただきたい「写生を超えた写生の句（森澄雄）」。

この頃の薺藍に定まりぬ

子規

去年今年貫く棒の如きもの

虚子

鷹のつらきびしく老いて哀れなり

鬼城

かたまつて薄き光の葦かな

水巴

雪解川名山けづる響かな

普羅

くろがねの秋の風鈴鳴りにけり

蛇笏

元日や手を洗ひをる夕ごころ

龍之介

青梅の臀うつくしくそろひけり

犀星

よろこばしきりに落つる木の実かな

風生

竹馬やいろはにほへとちりぢりに

万太郎

冬菊のまどふはおのがひかりのみ

秋桜子

枯菊と言ひ捨てんには情あり

たかし

ひらひらと月光降りぬ貝割菜

茅舎

みな大き袋を負へり雁渡る

三鬼

下萌えぬ人間それに従ひぬ

立子

祖母山も傾山も夕立かな

青邨

秋の暮漉瓶泉のこゑをなす

波郷

父の死や布団の下にはした錢

源二

死にたれば人来て大根焚きはじむ

槐太

一人居の秋風吹いて一ト日暮る

貞子

これらの句を深く理解できるかどうかはその人の力。

白蓮の諸手につつむ蕾かな 笹村 政子

白い蓮の開こうとしている蕾。開花を促しているのか、愛おしくて手で包んだのか。蓮は朝開く。私は「蓮は開く音がする」という俗説を確かめるため、昔、真夏の蒸し暑い早朝、わざわざ吹

田市の万博公園まで出かけた。朝日に灼け死にそうだったが我慢

して開くの待った。しかし一抹の不安は当たった。音がしない。

でも開花音がしないことを知っただけでも、遠方へ出かけた価値

はあったというべきか。ところでベトナムでは朝一番に開花した

蓮の黄金の薬からはす茶を作るというのをテレビ（世界で一番美

しい瞬間）で知った。蓮茶は蓮の花片を乾燥して茶にするのかと

思ったら、これが大間違いで、その製造方法は日本茶よりかなり

手が掛かる。乾燥させた蓮の香りを茶葉に移すのである。この句

は蓮の蕾の行方を手のひらで探っているのかも知れない。政子観

音のてのひらで。孫悟空になりたい。……とAKB65。へ以

下略





平居 濤子

厄除の代参として梅雨の寺
厄年の独り身の夏持て余す
この街の塀を飾りし凌霄花
雲海を足下に見て登高す
如何にせん箱いつぱいの空蟬を

延川五十昭

乙姫に溺れてみるか水中花
駆け昇る竜の疾さや梅雨出水
竜が棲む洲を覗けり梅雨出水
濁流は竜のうねりぞ梅雨出水
向こうから君の瞳や水中花

延川笙子

雨音の激しき夜の水中花
鬨竜の咆哮聞こゆ梅雨出水
雄叫びの胸に轟く梅雨出水
群竜の遡る波梅雨出水
拔手切る竜見えにけり梅雨出水